

5 ～地方での独自性の発揮～ 現代アートがもたらした 島の誇りとアイデンティティー

～香川県直島～



笠原 良二
KASAHARA Ryoji

株式会社ベネッセコーポレーション/直島事業室/室長

島しょ部では地方の中でもより地域の独自性を発揮することが求められている。町長と企業が共働き、島独自の地域づくりを目指し、島内に美術館を創出し島のアイデンティティーを確立した経緯とは…。

現代アートの島

備讃瀬戸に位置する周囲約16kmの小さな島「直島」が、「現代アートの島」として国内外から注目を集めています。

株式会社ベネッセコーポレーションと財団法人直島福武美術館財団によって、「ベネッセアートサイト直島」と総称される様々な現代アート活動が行われており、その中心施設として「ベネッセハウス」「家プロジェクト」「地中美術館」といったアート施設が公開、運営されています。

ここ数年、多くの人々が直島を訪れています。NPO法人直島町観光協会発表データによると、2008年の観光入込者数は342,591人で、島の人口の100倍もの人々が直島を訪れていることになります。またその数は、この10年で10倍近くの伸びを示しています。さらに、来島者の実に87.8%が“文化”や“アート”を目的として直島を訪れています。

客観的なデータはありませんが、直島への来島者は若い人たちが多く、中でも女性が多いと強く感じます。それが現代アートの持つ効果のひとつなのだと思います。現代アートが、過疎で高齢化する島(2008年度直島町の高齢化率約30%、全国平均22.1%)にとって一番少ない“若者の姿”を、交流人口として島に呼び込む原動力となっています。

さらには、ベネッセハウスの2008年度宿泊者データによると、全宿泊者の約15%が海外からの来島者であり、海外からの注目度が高いことが特徴です。その内アジアは40.8%、ヨーロッパは31.3%、北米は23.4%です。国別に見ると、1位韓国、2位アメリカ、

3位フランスの順番となっています。この順番はここ数年変わっていません。海外からの来島者が多く、その中でも欧米のウエートが大きいことが直島の特徴であり、瀬戸内海の小さな島が「現代アートを通じて世界とつながっている」と言えるでしょう。

このような現代アートの島は、どういうプロセスを経て生み出されていったのでしょうか。

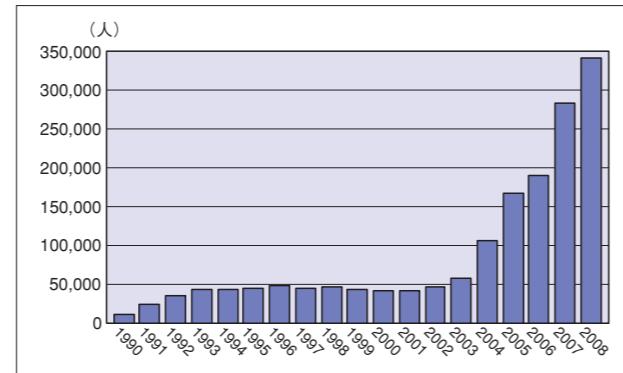


図1 直島町観光等入込数動態調査 (直島町観光協会調べ)

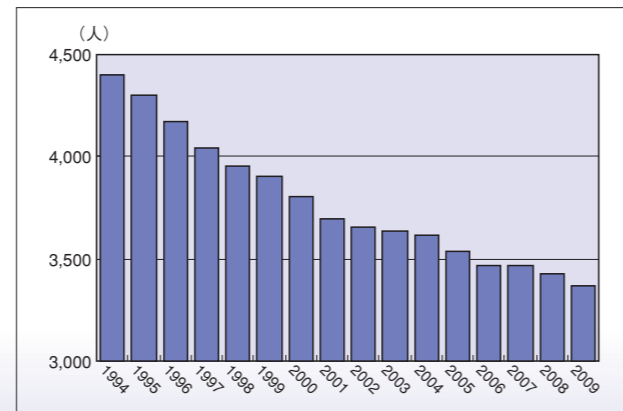


図2 直島町人口推移



写真1 カレル・アペル作「かえると猫」(直島国際キャンプ場) 写真2 ベネッセハウス

写真3 草間彌生作「南瓜」

直島の現状

直島町の行政区域は香川県。直島本島と周辺の2つの有人島を含む27の島々で直島町を構成しており、平成の大合併を経た現在でも単独町制を貫いています。

直島は香川県高松港の北方13kmなのに対し、岡山県宇野港からは南方3kmに位置し、岡山県玉野市より海底導水管で上水が送られるなど、香川県でありながら岡山県側との深いつながりを持っています。

2009年1月1日現在の人口は3,365人。最盛期は1960年代前半の約7,800人ですから、現在では半減してしまっています。人口は長期にわたって漸減してきていますが、ここ数年人口流出は減速傾向にあります。

直島の北部には三菱マテリアル株式会社直島製錬所があり、90有余年にわたって操業。銅を中心に金や銀、プラチナ等を製錬し、直島の産業の基幹を担っています。その一方で、煙害等の影響から長い間「製錬所のあるはげ山の島」として知られていたという側面も持っています。近年では隣の島「豊島」に不法投棄された産業廃棄物の中間処理施設建設を受け入れたことを契機に、環境リサイクル産業の拠点という新たな一面も見せています。

町づくりのグランドデザイン

ベネッセアートサイト直島の活動の起源を語る為には、1959～1995年の9期36年間に渡って町長を務めた故三宅親連氏の町づくりに対する基本方針に触れなければなりません。三宅氏は初めて編成した1960年度当初予算大綱説明の中で、「直島の北部は既存の直島製錬所を核として関連諸産業のより一層の振興をはかり、町経済の基盤とする。中央部は教育と文化の香り高い住民生活の場。南部は瀬戸内海国立公園エリアを中心に自然景観と歴史的な文化遺産を保存しながら、観光事業に活用することで町

の産業の柱にしたい(『直島町史』より)」と語っています。

この半世紀も前に発信された方針が、現在も直島の町づくりのグランドデザインとして生きており、さらに言えば、三宅氏の直島南部開発の夢や方針が、様々な曲折を経て、1985年11月の株式会社福武書店(現株式会社ベネッセコーポレーション)創業社長福武哲彦の直島訪問を実現させることとなったのです。

直島南部開発のスタート(1980年代後半)

株式会社ベネッセコーポレーションによる直島開発は、「瀬戸内海の島に世界中の子供たちが集えるようなキャンプ場を作りたい」という創業社長福武哲彦の夢と、「島の南側一帯を、文化的、健康的で清潔な観光地として開発したい」という町長三宅親連氏の信念が結合することでスタートしました。

1987年に現在のベネッセアートサイト直島の敷地となる直島南部一帯の約165haの土地を一括購入。具体的な施設展開としては、1989年の「直島国際キャンプ場」オープンが最初となりました。

もっともこの時期には、「現代アートの活動を軸として展開させる」という明確な開発の方向性はまだ打ち出されてはいません。ただ直島国際キャンプ場に現代アート作品『かえると猫』(カレル・アペル、1990)が設置されるなど、その後の活動の片鱗を伺うことはできます。

瀬戸内海の風景と現代アート(1990年代前半)

1992年、安藤忠雄氏設計の現代美術館とホテルが融合した「ベネッセハウス」がオープンします。直島における現代アート活動の拠点が生まれたわけです。

オープン当初の1992年から翌年にかけて、ベネッセハウスでは積極的に企画特別展を実施しています。1992年12月の「柳幸典展 WANDERING POSITION」や1993年10月に開催した「マイク・アン



写真4 家プロジェクト「角屋」



写真5 家プロジェクト「護王神社」 杉本博司作「Appropriate Proportion」

ド・ダグ・スターン展」などの純粋な現代アートを軸としながらも、オープニング企画として開催された「三宅一生展 ツイスト」や、1993年9月の「勅使河原宏風とともに展」といった広く文化全般にまで視野を広げた展示があるなど内容は多岐にわたり、約1年半の間に5回もの展示会を開催しています。

これらの企画展示会やそれに関連するイベントを重ねた時期を経て、ベネッセハウスでの活動は、常設展重視、一点一点の作品、そしてコレクション重視へと方針が変化していきました。

それは、「ベネッセハウス」そのもののコンセプトがそうであるように、直島のアート活動のテーマを「世界に誇るべき美しい景観である瀬戸内海の風景(場)と現代アートを如何に融合させるか」といった視点へ明確化させていくことで、直島の場でしか成立しない作品を作り出していく必要が生まれたことによる必然だったと言えるでしょう。

その後は、ベネッセハウスの館内をはじめ敷地内の屋外で、その場でしか成立し得ない現代アート作品が生まれていくことになり、現代アート作品を通して瀬戸内海の美しさを再発見することにもつながっていきました。また、それらの実現の為にコミッションワーク方式が取り入れられ、現地制作作品が増えていったのもこの時期からであり、現在も直島のシンボリックな作品として親しまれている草間彌生作『南瓜』が設置されたのもこの段階の1994年秋のことです。

また、ベネッセハウスは今でもそうですが、オープン当初より直島町民とその同伴者は入館料を無料にし、さらに各展示会関連のイベントに島民を招待するなど、できる限り島民にとって開かれた美術館であるようとしてきました。

歴史や暮らしと現代アート(1990年代後半)

1990年代後半に入り、それまで直島南部の国立公園内にあるベネッセコーポレーション所有地内でのみ展開していたアート活動が、そのエリアから飛び出し、直島の歴史や人々の暮らしとの組み合わせの中で、人々の住む集落を舞台に展開されていくこととなります。それまでの瀬戸内の自然と現代アートの組み合わせを中心とした視点から、歴史や人々の暮らしなどの新しい視点が加わったのです。

同時に、来島者と直島との接点が、それまでの閉じた場所から、人々が暮らす集落へと拡がり、現代アートと島民と来島者の有機的なつながりが生み出されていくこととなりました。

その具体的な活動のスタートとなったのが1998年完成した家プロジェクト第1弾の「角屋」です。直島の本村地区に残る築200年以上の民家を舞台に、外観は極力元あった姿に再生させ、一方で内部を現代アートの空間として再生させました。「あるものを壊して新しいものを創る」から、「あるものを活かして新しいものを創る」へと、その後の直島におけるアートプロジェクト全体に影響を与える重要なコンセプトを生み出しました。その後、家プロジェクトは「南寺」「きんざ」と展開し、第4弾「護王神社」では地域の神社を現代アートで再生させるまでに至っています。

また2001年には「スタンダード」展と題された、直島全島を舞台とした現代アートの展示会を開催。本村地区だけでなく直島全島へと、現代アートを拡げました。この展示会では、全国から参加してくれた多くの若者と島の中高年齢の方々ボランティアスタッフとして日常運営を担当しました。この頃から、若い来島者と島の中高年齢者との交流が深まっていくこととなります。



写真6 スタンダード展 大竹伸朗作「落合商店」



写真7 地中美術館



写真8 のれんプロジェクト

これらのアート活動を通じて、島に住む人たちが地域の持つ歴史や様々な資源を自らで再評価できたことが、その後の島の活性化へとつながりました。

アートの核創りと新たな地域へ(2000年代前半～)

地域との関係の中で、直島の現代アート活動が広がりを見せる一方で、世界に通用するアートの場としての核を創る挑戦が始まります。それが2004年の直島福武美術館財団および地中美術館の設立です。この美術館のオープンを機に来島者が一気に増加。それとともに、直島内の様々な動きが一層活発化していく起爆剤となりました。

地中美術館というアートの核を生み出した後に、改めて地域と現代アートとの共生を目指していくこととなります。それが2006年秋に開催した「直島スタンダード2」です。この展示会では直島の稲田の「再生」に取り組むなど、単なる現代アート活動の範疇を超え、「地域とアートの共生」「アートによる地域の活性化」を強く意識したものとなりました。

直島での様々な動き

1990年代後半の家プロジェクトのスタートと呼応した形で、直島町内でも様々な動きが生まれていきます。

行政サイドでは、家プロジェクトが展開される本村地区を景観保護重点地区に指定し、景観審議会を設置。併せて、景観保全ソフト事業として屋号プロジェクトを実施。本村地区の各民家に残る屋号を表札にして取り付けるとともに、屋号マップを作成。来島者の町歩きツールとしました。また、2001年に実施した「スタンダード」展の企画のひとつであった加納容子氏によるのれん制作と本村地区の各民家への設置が、町の補助による「のれんプロジェクト」として継続。現在では本村地区の約50軒の玄関にのれんがかけられ、まち並みに華を添えています。

また直島町観光協会が設立され、来島者の受け入れ業務を開始。さらには、町の有志による観光ボ

ランティアガイド組織が設立され、中高年齢者のボランティアスタッフによって、多くの見学者へのガイドが実施されるようになりました。

2004年3月には、島外から移住してきた大塚ルリ子氏が本村地区に「カフェまるや」をオープンさせます。それまでの長い間本村地区には飲食店がなく、増えていく来島者のニーズに対応できていませんでしたが、新しい賑わい創りの先駆けとなりました。その後、直島住民や移住者によるカフェや飲食店がオープン。これらの多くは単なる飲食店としてだけではなく、来島者と島の人との交流の場としての機能や、新しい文化・アート活動の拠点としての機能も果たしつつあります。

さらに若者向けの民宿等の商売も生まれていきます。宿泊事業者も増えてきており、産業というにはまだまだ小規模かもしれませんが、着実に経済的な側面からも島の活性化にもつながっているとと言えます。

アートを越えた効果

約20年にわたるベネッセアートサイト直島の活動は、単なる現代アート活動の範囲を超え、確実に「直島」という過疎高齢化の地域に、新たな誇りと活性化をもたらして来ました。それは、直島という場が現代アートと組み合わせられることで、どこにでもある無名の地域から、魅力ある固有の場所へと生まれ変わるプロセスだったと思います。単にアート作品がそこにあるというだけでなく、その場所の持つ自然や歴史やそこに暮らす人々とのつながりながら、そこでしか成立しないものとしてアート作品が生まれており、そのプロセスや成果がアートを越えた様々な効果を直島にもたらしたのではないかと考えています。

<写真提供>
写真2 山本紉、写真3 安斎重男、写真4、6、8 上野則宏
写真5 渡邊修、写真7 藤塚光政